様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０４２０

研究課題名（和文）戦時期台湾の中国語文学研究－雑誌『南方』を中心に

研究課題名（英文）Study of Chinese literature in Taiwan during the war

研究代表者
星名　宏修（Hoshina, Hironobu）

一橋大学・言語社会研究科・教授

研究者番号：００２８４９４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、これまで皇民化運動によって抑圧されたと考えられてきた中国語による文学表現を、戦時動員という角度から再考することを目的とした。
中国大陸や南洋に日本の勢力圏が拡大したことにより、台湾人の「海外進出」の機会は着実に増加し、同時に中国語によるプロパガンダの必要性も急上昇した。そうした需要を満たすため、皇民化の論理に反してでも、中国語による大衆的な文学テクストの創出が求められたのである。

研究成果の概要（英文）：I studied Chinese literature in Taiwan of the war time.Many scholars have thought Chinese literature doesn't exist in Taiwan in the war time.Actually, popular Chinese literature was required to let the war cooperate.Because literature of Chinese language is useful to execute a war.Logic of “kominka” was also ignored for the need.

研究分野：台湾文学

キーワード：海外進出　皇民化政策　中国語文学

１．研究開始当初の背景

（１）1937 年 4 月以降、台湾の新聞・雑誌は、中国語欄の「自主的」廃止に追いこまれた。これによって台湾文学は大きな転換点を迎える。中国語で創作していた文学者の多くは筆を折り、「国語」（＊日本語のこと。以下同様）文学の時代が訪れた、というのが従来の文学史の大方の記述であった。

しかし近年、この皇民化時期においても中国語によるさまざまな表現が行われていたことが注目されるようになった。代表的な媒体として中国語雑誌『風月報』（1937.7-41.6）とその後継誌『南方』（1941.7-44.1）の存在が挙げられる。さらに創刊号のみで終焉した『南国文芸』（1941.12）についても、柳書琴の論文「文化遺産與知識闘争－戦争期漢文現代文学雑誌『南国文芸』」によって、その存在が明らかになった。

「国語」普及を政策の基調としてきた台湾総督府が、なぜこの時期に中国語の雑誌刊行を容認したのか。皇民化運動に反するかに見える中国語による文学創作は、戦争の遂行にどのような役割を果たしたのだろうか。

（２）ここ数年、研究代表者は台湾の大衆文学を、その読者層の解明に重点を置いて研究を行ってきた。例えば日本内地で多くの読者を擁した探偵小説は、台湾においては統治の第一線に立つ警察関係者を主な書き手／読み手とする閉ざされた空間内でのみ流通していた。このように、内地の「大衆文学」が植民地においては必ずしも「大衆」的な広がりを持った読者を勝ち得ていないのである。植民地においては民族・階級・学歴の違いによる「国語」リテラシーの差異によって、受容者の間に大きな偏りが生じている点に、植民地近代の特質が集中的に現れていると考察してきた。

本研究課題も、読者／受容者の側面から戦時期の文学活動のある側面を明らかにしようとするものである。

1940 年代初期の台湾では、「国語」普及率が 50%を越えたと言われる。しかし実際には「国語」を解しない台湾人「大衆」も多く、彼らを戦争に動員するためには、たとえ皇民化運動に反したとしても、中国語は欠かせないツールであった。

台湾における先行研究によれば、雑誌『南方』とその前身『風月報』の発行部数は、少なく見積もっても 7000 部と言われている。これまで皇民化時期の文学については、『文芸台湾』や『台湾文学』など「国語」雑誌とそこに掲載された作品が主に論じられてきたが、これらに倍する「大衆」的な読者を中国語雑誌『南方』は獲得していたことになる。そこには中国語ならではの受容のしやすさと同時に、雑誌の通俗性も大きく作用したと言われている。

２．研究の目的

（１）上記のような背景を踏まえ、戦時期における台湾人読者「大衆」は、どのように文学を享受していたのかを考察することを本研究の第一の目的とした。

探偵小説に代表される「国語」大衆文学の非「大衆」性は、台湾人の「国語」リテラシーの低さが大きな原因であることはすでに述べた。そうした読者「大衆」にとっての中国語テクストの意味を考察することで、戦時期文学の姿を別の側面から明らかにすることも目的とした。もちろん皇民化政策によって、大部分の中国語新聞雑誌が廃刊に追いやられるなか『風月報』と『南方』が生き延びることができたのは、これらの雑誌が戦争翼賛のメディアだったためであることは言うまでもない。

（２）このような雑誌『南方』の読者は台湾だけではなく、遠く離れた南洋や日本占領下の上海にも及んでいた。こうした雑誌の流通網の広がりもあり、戦時期の台湾文学を台湾という島を結節点とした東アジアの中国語読書圏に位置づけ考察することも重要な目的として設定した。

（３）これらの中国語雑誌に関しては、すでに台湾においていくつかの先行研究が存在する。しかしその多くは雑誌に描かれた娯楽や消費文化の分析に重点が置かれ、同時期の「国語」文学を視野に入れた戦争文学としての分析は不十分なものである。本研究ではこうした状況を踏まえて、『文芸台湾』『台湾文学』など「国語」雑誌の作品群も同時に考察の対象とする。

３．研究の方法

（１）まずは雑誌『南方』の分析が作業の中心となる。日中戦争から大東亜戦争へと拡大する総力戦を翼賛するために作られた雑誌『南方』には、志願兵や皇民奉公会、日本占領地上海の動向など、時事的な話題が数多く掲載されている。こうした性格の雑誌を扱うには、研究蓄積の豊富な同時期の「国語」メディアの動向も分析しなければならない。

（２）上記の作業以外にも、戦時期の台湾社会や総力戦体制下の文化・文学に関する先行研究を収集し参照することは、研究期間を通じて行う必要がある。

４．研究成果

（１）本研究課題は、これまで皇民化運動によって抑圧されたと考えられてきた中国語による文学表現を、戦時動員という角度から再考することを目的とした。

そのための切り口として、雑誌『南方』には、日本占領下の中国諸都市に関する記述がしばしば見られることから、台湾人にとって戦争のさなかに中国へ渡ることの意味を問う作業を行った。その成果は「「海外進出」

とは何だったのか－紺谷淑藻郎「海口印象記」を読む」として台湾の清華大学台湾文学研究所の論文集に収録された（次項、［図書］の③）。同論文は、日本の戦争文学を代表する火野葦平が執筆したルポルタージュ『海南島記』を補助軸として、戦時期の台湾と海南島の往来とその文学的な表現を検討したものである。

台湾と中国・あるいは南洋とのつながりとそれをめぐる表現は、［学会発表］②でも追究した。神戸大学で開催されたシンポジウムでは、日本占領下の北平における台湾人の中国語文学の開拓者でもある鍾理和の日記を分析した。また彼の友人の藍明谷の中国語作品「一個少女的死」を題材として、台湾から中国へ渡った従軍看護婦の姿を分析した。また皇民化時期の『文芸台湾』に掲載された河野慶彦の「湯わかし」という小説が、あたかも「一個少女的死」の「前史」のように読めることも論じた。シンポジウムの報告は、研究代表者が準備中の単著に収録するための一章として、論文化の作業は終えている。

（２）戦時期の台湾人「読者大衆」のありようを検討することも、本研究課題の重要な柱である。この点について、以下に述べる２つの角度から研究を行った。

①戦時期に先立つ 1930 年代の「大衆」像の解明。次項の［図書］②に収録された論文がこれに該当する。2003 年に制作された台湾のドキュメンタリー映画『跳舞時代』を取り上げ、プレ戦時期と言える 1930 年代前半のモダン現象を、それを享受した「大衆」とそこから排除された階級の問題を論じたものである。「大衆」文化を受容し得ない広大な大衆の存在は、中国語の通俗誌である『南方』やその前身の『風月報』の受容者を考察する際にも不可欠の視座となることは言うまでもない。

また次項の研究成果には挙げていないが、研究代表者が所属する一橋大学大学院言語社会研究科で 2011 年度から 2012 年度にかけて行った研究プロジェクト「1930 年代台湾における大衆文化」においても、同様の問題を集団的に検討してきた。その成果の一部は、研究科の紀要『言語社会』第７号（2013 年３月刊行）の小特集にまとめられている。
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/25678

②戦時期の中国語ラジオの「聴衆」研究。これは「読者」大衆を検討する延長線上に浮かび上がってきた新たなテーマである。

日中戦争をきっかけとする皇民化運動のなかで、中国語の新聞や雑誌が『風月報』や『南方』を除いて基本的に抑圧されたことが本研究の大前提となっている。しかし日中戦争の勃発と同時に、聴覚によるメディア－ラジオ－においては、紙媒体とは逆に、台湾語による放送が始まり、戦時動員の重要な柱となった。識字リテラシーに限定されない台湾語の放送は、戦争期に新たな「大衆」的な聴衆を獲得することになる。このラジオ放送の番組作りにあたっていたのは、在台日本人の文化人が主であったが、台湾語放送の開始とその拡充につれ、台湾人文化人もそこに参入していくことになる。そこには雑誌『南方』の寄稿者でもある張邱東松も含まれていた。

この研究については、次項、［学会発表］の①で初歩的な報告を行い、現在単著に収録するための論文執筆作業を行っているところである。

総じて言えば、戦時期の台湾における中国語は、活字媒体でも聴覚メディアにおいても全面的に抑圧されていたわけではなく、「国語」習得を通じた台湾人の日本への同化とは別の論理で、選別的に推進されていたことが明らかになった。ここで言う選別的というのは、ひとつは、台湾島外に広がりつつある戦争による需要が引き起こしたものである。中国大陸や南洋に日本の勢力圏が拡大したことで、台湾人の「海外進出」の機会は着実に増加し、同時に中国語によるプロパガンダの必要性も急上昇した。そうした需要を満たすために、皇民化の論理に反してでも、中国語による大衆的な文学テクストの創出が求められたのである。

これは同時に、戦争期における大衆娯楽の提供という切迫した要請にも迫られたものであった。厳しく長期化する戦争を勝ち抜くため娯楽の重要性は、同時期の日本では大政翼賛会などでも繰り返し議論されてきた。植民地台湾における大衆的な娯楽は、活字であれラジオであれ、畢竟中国語（ないしは台湾語）と切り離せるものではなかった。そうした現状を踏まえるならば、台湾人「大衆」に適切な娯楽を提供することが、皇民化と反するように見えたのは無理もないことであった。雑誌『南方』の活動も、そうした文脈のなかに配置することで、その意味を理解することが可能になるのである。

ここまで本研究が達成したことを述べてきたが、今後の課題もやはり残っている。
まず『南方』をめぐる歴史的状況はかなり解明されたとはいえ、個別具体的な作品分析はまだ不十分である。また計画の段階では、雑誌『南方』とあわせて日本占領下の上海で刊行された『文友』などの雑誌との比較検討も念頭に置いていたが、時間的な制約もあり実施できなかったことも今後の課題である。

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計２件）
①星名宏修、「耳で聞く文学体験－植民地台湾のラジオドラマ」、音盤を通してみる声の近代－台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に、2014 年 11 月 24 日、国立民族学博物館（大阪府・吹田市）

②星名宏修、「看護助手、海を渡る－河野慶彦「湯わかし」を読む」、戦争と女性 漂泊する叙事－1940 年代中華圏における文化接触史、2012 年 11 月 11 日、神戸大学（兵庫県・神戸市）

〔図書〕（計３件）
①陳翠蓮・川島真・星名宏修・林昌華・石丸雅邦・呂美親・周俊宇・王品涵・鳳気至純平・新田龍希・石廷宇・羅詩雲・曾齡儀・徐聖凱・張淑媚・蔡元隆・許コウ・村上享二・彭琳淞、稲郷出版社（台湾）、『跨域青年学者台湾史研究 第五集』、2013 年、606 頁（７－８頁）

②黄建業・張小虹・陳儒修・鄧筠・多田治・邱貴芬・呉乙峰・楊力州・朱詩倩・簡偉斯・郭珍弟・星名宏修、あるむ、『台湾映画表象の現在－可視と不可視のあいだ』、2011 年、266 頁（224－244 頁）

③陳萬益・史書美・張誦聖・劉紀蕙・李育霖・許俊雅・黄善美・金良守・崔末順・金尚浩・星名宏修・朱恵足・呉佩珍・張泉・楊佳嫻・陳智徳・須文蔚・須文蔚・陳建忠・莊華興・陳正芳、清華大学台湾文学研究所（台湾）、『跨国的殖民記憶與冷戦経験－台湾文学的比較文学研究』、2011 年、533 頁（213－240 頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
星名　宏修（Hoshina,Hironobu）
一橋大学・言語社会研究科・教授
研究者番号：００２８４９４３